

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
1-1 北海道支部	鳥越 俊彦	札幌医科大学医学部	この度、日本病理学会北海道支部選出理事に立候補致しました。私は30年以上に渡り臨床病理およびがんの基礎研究に携わってきました。この間に、がんに対する分子標的薬の臨床応用、ゲノム医学の臨床応用から、近年のがん免疫療法の大きな進歩を経験しました。基礎医学研究および臨床医学研究から病理医への期待は日に日に増しており、これから病理学が大躍進する可能性に胸弾ませております。この大きな期待に応えるためにも、若手病理医のリクルート・教育、女性病理医のサポートが大きなカギになると同時に、我々の一大使命だと痛感しております。これまでの美しい形態学に基づいた病理学を、分子病理学から読み解きながらお互いの融合を試み、さらには人工知能(AI)という強力なツールを得て、これまでの病理学の枠にとらわれない次世代病理学の開拓を目指します。是非先生方の御指導を賜りつつ、精進させて頂けますよう御支持の程お願い申し上げます。
1-2 東北支部	菅井 有	岩手医科大学医学部病理診断学講座	二年間の任期の日本病理学会東北支部長を何とか無事に務めることができましたのもご支援、ご協力いただきました支部会の役員及び会員の先生方のお陰です。この場を借りて厚く御礼申し上げます。この2年間は掛け声倒れになった部分もありましたが、若手対象のアワードを支部会で新設することができました。まだ改善の余地があると思いますが、若手からの評価も“支部会への参加の楽しみが増した”と概ね好評と伺っています。当初予定していた東北支部会共通の基礎資料の作製はまだ議論の最中です。また東北・新潟県域内での遠隔医療の充実化なども今後の課題として残されています。これらの課題が実現できるよう支部会の役員、会員の先生方のご協力をいただきながら、微力ではありますが全力で支部会の運営に尽力したいと思います。支部会の先生方には今後2年間のご支援、ご協力をお願い申し上げます、私の立候補のご挨拶とさせていただきます。
1-3 関東支部	宇於崎 宏	帝京大学医学部病理学講座	病理医には日々の診断症例、剖検例が最も重要です。私はこれまで、個々の症例を大切にしつつ、卒前・卒後教育や研究、学会活動にも携わって参りました。病事情報ネットワークセンター管理運営委員長、剖検情報委員長、情報セキュリティ委員長、広報委員などを務めて参りました。学会での交流、議論は、症例の理解、個々人の研究活動にも活力を与えてくれるものです。今後は関東支部および学会全体でのデータの活用、成果の還元にも更に力を注ぎたいと考えております。これまで、剖検情報やバーチャルスライドでデータベースに関わって参りましたが、これらの活用に一層の力を入れると共に、皆様への広報・支援にも一層、注力して参ります。情報環境の整備は人材育成や研究交流にも役立ち、次の時代の病理学に繋がっていくものと考えます。病理学の発展に微力でも貢献したいと考えております。ご支援いただきますよう、お願い申し上げます。
1-3 関東支部	大橋 健一	横浜市立大学医学部・大学院医学研究科	この度日本病理学会関東支部選出理事の2期目として立候補させていただきました。1期目においてはこれまでの関東支部の活動を踏襲し、学術集会の充実化、会員の皆様への情報伝達、若手医師のリクルート活動などを行ってきました。学術集会における特別講演は症例検討と並び、生涯教育にとって非常に重要なものですが、年8回の講演内容はますます充実しており、参加される先生の数も増加しています。会場の確保が新たな問題になっていますが、引き続き学術集会の充実化を進めたいと思います。新専門医制度が始まりましたが、運営にはまだ混乱が見られます。各プログラムの円滑な運営を助けていきたいと思っています。若手医師のためのリクルート活動については夏の学校の充実化、学生・研究医に対する周知を進めたいと思います。支部学術集会は重要な生涯教育の場であり、貴重な情報交換の場です。益々充実したものになるよう皆様のご支援をお願いします。
1-4 中部支部	村田 哲也	J A 三重厚生連鈴鹿中央総合病院	私は卒後7年目に現施設に赴任してからの30年近い年月は診断病理中心の業務をしてまいりました。このうち半分近くはいわゆる「一人病理医」として勤務し、この時に自分で行った職場業務改善などから2000年に日本病理学会学術奨励賞を受賞致しました。支部活動への参画も積極的に行ってまいりました。また12年前より病理学会専門医制度運営委員会の委員を拝命し、専門医制度について今後も全力を尽くす所存であります。支部長には支部の事務作業が必須となりますが、この点については三重大学医学部腫瘍病理学および附属病院病理部よりお手伝いをいただくことになっております。私は地域基幹病院の少人数部署からの生の声を理事会に直接届けたいと考えております。支部活動を発展させるとともに事務作業の簡素化も進め、地域施設への負担軽減も進めていく所存であります。
1-5 近畿支部	横崎 宏	神戸大学大学院医学研究科病理学講座	私は平成14年4月より近畿支部に所属し、爾来支部幹事ならびに副支部長(学術委員長)を歴任し、支部学術集会や支部夏の学校の企画を通して、近畿地区における病理医・病理学者を志望する若い医師・歯科医師を増やすことに尽力して参りました。平成30年度に支部長を拝命してからは、幹事会・学術委員会をはじめとした支部構成員各位からのご意見を伺いつつ、支部学術集会の充実と運営費スリム化や、学術集会および夏の学校における子育て世代病理医の支援(託児)などに取り組んで参りました。この度の立候補に際し、これまで二年間の活動をさらに発展させ、支部構成員のニーズに迅速に対応した学術集会の企画・運営や夏の学校を中心とした若手リクルート方略の工夫、更なる男女共同参画事業の充実等を推進し、近畿支部の学術活動をより活性化したいと考えています。
1-6 中国・四国支部	池田 栄二	山口大学大学院医学系研究科病理形態学講座	私が関東支部から中国・四国支部に移籍し、11年の月日が経ちました。その間、幹事(業務委員会委員長)として支部運営に携わり、病理医の将来を見据え、支部の果たすべき役割について考える機会を得ました。支部には、病理診断について議論し学ぶ場であるスライドカンファレンス等の運営基盤は確立されており、また若手病理医の会の発足により若手会員も積極的に支部活動に参加する体制となっております。一方、学術的側面については、新たな体制を構築する余地があるのではと考えております。遺伝子診断、AIの導入など、診断業務における病理の立ち位置が刻々と変化するなか、その変化に柔軟に対応するためには、常日頃から学術的視野をもつことが必要となります。多忙な病理医への学術的な場の提供も支部の果たすべき大切な役割であり、業務と学術の両側面がバランスのとれた支部体制の構築を目指したいと考えております。
1-7 九州・沖縄支部	鍋島 一樹	福岡大学医学部病理学講座・病理部	支部活動は順調ですので、「若手病理医の会」の活動を一層サポートし、updateされたティーチングファイルの円滑な運用に取り組み、例年通り年6回のスラコン、年1回の病理集談会、年2回の学術講演会、病理学校開催の継続・充実に努めたい。支部ホームページのセキュリティ対策や永続的運用基盤の整備、子育て支援(学会時の託児支援制度)の維持にも取り組んでいきたい。

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
全国区選出理事	北川 昌伸	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科	全国区選出理事に立候補させていただきました東京医科歯科大学包括病理の北川昌伸でございます。会員の皆様のご支援のもと、病理学会理事長として学会全般の運営を担当させていただきました。学会が今後更なる発展を遂げるためには、創造性豊かな学会活動を充実したものにすること、社会のニーズに応えられる質の高い病理専門医の数を増やし、かつ研究志向の病理学者による基礎・臨床をリードする研究を可能にする体制を構築することが肝要と考えます。魅力ある病理学会を発展させるために適切な舵取りをすることが必須です。がんゲノム医療の普及に当たって、病理学会として新たな体制を導入する勇気を持つことも必要となりましょう。厚労省や文科省はもちろん医学会、全国医学部長病院長会議、地域の協議会等との連携を取りながら病理学会の適正な運営に貢献させていただきたいと考えておりますので、是非宜しくご支援いただけますようお願い申し上げます。
	佐々木 毅	東京大学大学院医学系研究科	この度全国区理事に立候補いたしました東京大学佐々木毅と申します。前回初めて全国区理事に選出させていただいてから今日まで病理学会の主に渉外担当として、診療報酬改定（16年間担当）はじめ、がんゲノム医療中核拠点病院及び拠点・連携病院の施設要件等に関する検討会、がんゲノム医療に関する検討会等厚労省とのパイプライン役として活動して参りました。また「希少がん診断のための病理医育成事業」では予算獲得から国庫補助金事業として開始するまで厚労省との折衝役を務め、十分な事業予算を獲得し、現在希少がん病理診断支援検討委員長として講習会やe-ラーニング等を展開し皆様方に提供しております。さらに分子病理専門医制度の立ち上げや実施にも関わっております。これまでの活動や人脈を生かしながら引き続き行政府や立法府と病理学会との橋渡し役として努力する所存でございますので、何卒よろしくごお願い申し上げます。
	田中 伸哉	北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室	日本病理学会全国区選出理事選挙に立候補致します。これまで2期4年理事として学会運営に関わらせていただきました。この間、学会・病理医を取り巻く環境は社会情勢とともに変化し続けています。ゲノム医療の中での病理医の地位の確立、AIを用いた学会としての研究の推進、分子病理専門医制度の設立など重要課題に取り組んで参りました。医療安全、剖検の重要性、若手リクルート、学会の国際化、デジタルパソロジーなども重要な課題です。これらの課題に取り組み病理学が輝き続けるために最も重要なことは、臨床病理と実験病理のバランスのとれた発展であると考えています。若手医師が一人でも多く病理医を目指すことができるよう病理診断の魅力、醍醐味を伝えていきます。また病理学教室の基礎研究が他分野とは一味違う魅力があることを啓蒙します。診断病理、実験病理がシンクロナイズして大きく学会員が発展できるような学会運営を目指す所存です。
	豊國 伸哉	名古屋大学大学院医学系研究科	この度、日本病理学会全国区理事選挙に立候補させていただきました。私は医学部卒業・初期臨床研修の後、30年間に渡り病理学教室に所属し、病理学の教育・研究・診断業務に日々携わってまいりました。その間、大きな変遷がありましたが、そのコアは「基礎研究の成果が病理診断に還元され、諸先輩方の努力により医療における病理専門医の立場が確立され、病理専門医が治療法選択に深く関わるようになったこと」と理解しております。病理学において、基礎研究と病理診断はいわば車の両輪であり、基礎研究の発展なしに病理診断の発展はありません。さらに、基礎研究成果の社会還元過程においても、病理研究医の重要性は増すばかりです。この解決には、医学部学生のうちから病理学に多くの若者を引きつけることが極めて重要です。私はこれまでの経験を十分に活かしながら、特に学術とリクルートを通じて日本病理学会の発展のために全力を尽くす所存です。
	小田 義直	九州大学大学院医学研究院形態機能病理学	7年前から全国理事、3年前から副理事長としての活動を行ってきました。以下の3点についてその実現に邁進してゆきます。リサーチマインドを持った病理医育成：研究推進委員長などを通じて学会の学術活動活性化に貢献してきました。2016年病理学会カンファレンス世話人を務め、さらにゲノム研究用・診療用規程を策定しその普及に努めました。「病理学者」の面を併せ持つ病理医育成に努めてゆきます。来年度は「次世代病理学—叡智の統合と世界への発信」というテーマで春の総会のお世話をさせていただきます。国際的なバランス感覚を持った病理医育成：日英・日独・日欧病理学会交流事業、アジア諸国との交流をさらに充実させ若手病理医の目を積極的に海外に向けてゆくことを目指します。病理専門医数の増加：若者に魅力ある病理専門医のアピールを行ってゆきます。病理学会活動を魅力あるものに改革を進め、次世代の病理専門医を増やす努力を継続します。
	森井 英一	大阪大学大学院医学系研究科病態病理学・病理診断科	病理学は医学の根幹をなしており、がんゲノム医療やコンパニオン診断においても病理診断医の責務がますます重要視されています。私はこれまで、医療業務委員長、ガイドライン委員長、そして直近2年は病理専門医制度運営委員長として各方面の先生方や関連学会と共によりよい体制、働きやすい体制の構築に努めてまいりました。専門医機構や厚労省と折衝し、いかに現実的な専門医の運用を実現するか、ワークライフバランスを保ちながらいかに病理診断を行なうか、解決しないといけない問題が山積しています。再選させていただいた場合には、これらの取り組みに一層汗を流す所存です。病理医は様々な病態を日々観察し、研究の着想を得やすい環境にいたるとも言えます。病理診断とともに病理研究の推進、特に活力ある若手研究者の育成のためにも、みんな元気で働ける環境を作りたいと強く思っております。何卒ご支援賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。
	落合 淳志	国立研究開発法人国立がん研究センター	医療・科学の発展と社会の要請の変化により我が国の医療体制が大きく変わりつつあります。この2年間日本病理学会北川理事長のもとで、学会理事として病理診断の標準化と品質管理を中心に活動し、多くの臨床学会と協働して26種類の癌取り扱い規約の統一を目指した「領域横断的癌取り扱い規約第1版」の出版、国際的には第5版WHO組織分類の編集へ参画、日本人病理医をWHO組織分類執筆と国際病理報告書会議ICCRへの参画させる組織体制の構築に注力してきました。また、我が国のゲノム医療を適切に推進するため、分子病理専門医制度を立ち上げました。病理の基盤である研究と診療の両輪を進めるためには、病理診断の標準化と品質管理に対応した、病理診断および病理に関連する診療報酬も同時に考えていく必要があります。今後、多くの臨床系学会や厚生労働省と協働し、病理の研究と医療が適切になされるために、日本病理学会へ貢献する所存です。
	増田 しのぶ	日本大学医学部病態病理学系腫瘍病理学分野	病理医を取り巻く環境は急速に変化しています。病理医各人が直面する課題は、研究、診療いずれの場面においても個別的となっており、施設規模に応じた役割は大規模施設と一人病理医で異なり、また、遠隔医療やゲノム医療など直面する課題も多岐にわたっています。候補者は、理事として教育委員会、精度管理委員会、ゲノム病理標準化講習会委員会委員長を務めてまいりました。その中で、各医療機関における臨床検査科と病理診断科の協調関係再考の必要性を痛感しています。変動する社会において日本病理学会が果たすべき役割に貢献するため、理事として立候補いたします。誠心誠意尽力いたす所存ですので、どうぞご支援のほどよろしくお願いいたします。1. 病態解明における病理の重要性を理解する研究者を育てる。2. 病理診断の価値を守り、高める。3. 次世代病理医のワークライフバランスを整える。
	都築 豊徳	愛知医科大学病院 病理診断科	近代医学の進歩は目覚ましく、病理にはそれに対する貢献が期待されています。その一方では人員不足とは無関係な、日常業務量の増加並びに研究結果への要求が突き付けられています。また、人工知能の進歩に対する期待と不安が病理関係者の間で交錯しているのも現状かと思えます。私は今まで人体病理学に関する業務、研究及び国際関係に携わってきました。病理学会関係では、国際交流委員会、癌取扱い規約委員会、Pathology International副編集長を務めてきました。病理学の更なる発展のためには、人体病理と実験病理の融合を進め、積極的に海外の学会及び病理医との交流し、リサーチマインド及び国際感覚を持った病理医の育成が必要と考えています。更には、ワークバランスの充実させ、労働環境を改善することにより、次世代にとっても病理医が魅力ある職業であるように努力します。病理学会員の皆様の御支援をお願い致します。
	坂元 亨宇	慶應義塾大学医学部病理学教室	皆様のご支援の下、PI編集長を8年間、財務委員長として常任理事を6年間務めさせていただきました。また、本年5月には、第108回日本病理学会総会を主催させていただきました。これらの経験を生かして、学会の発展に引き続き貢献出来ればと考え、理事に立候補させていただきます。PIは、会員・編集委員皆様の多大なご支援のおかげによりまして、念願のインパクトファクター2を今年初めて超えることが出来ました。学会の財務の安定も引き続きの重要な課題です。病理学は、基礎と臨床、診断と治療の要に位置する基盤的で重要な学問です。ゲノム医療の発展、AIなどの情報化への対応など、新たな課題にも柔軟に対応しながら、病理学の基盤を充実させていくことが必要と考えています。そして、会員の皆様が病理医・研究者として活躍できる環境を整えることに寄与できればと思います。若手の育成にも一層取り組んで参ります。何卒宜しくごお願いいたします。
鬼島 宏	弘前大学大学院医学研究科病理生命科学講座	今回、全国区選出理事に立候補させていただきます。私は、学会活動を通じてこれまで主に4点につき実践して参りました：(1)生涯教育システム構築（専門医試験レベルのバーチャルスライド e-learning）、(2)若手病理医の育成・学生発表、(3)外部精度保証機構NPO事業の展開、(4) Pathology Internationalへの貢献。これらは、生涯教育委員会（委員長）・精度管理委員会・癌取扱い規約委員会・常任刊行委員会（Pathol. Int.）・NPO（副理事長）を中心に行っています。地方大学にふさわしい教育・研究環境を整備し、多くの若手医師・大学院生と共に病理学の研鑽に励んでいます。上記4点で特に(1)生涯教育の充実、(2)社会の要望も強く日本病理学会の重要課題であり、更なる尽力が必要です。今後も、生涯教育の充実も含めて、学会が今後さらに発展するよう奮励努力いたします。	

選出区分3：口腔病理部会長兼全国区選出理事（歯科医師免許所有者） 1名

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
口腔病理部会長兼 全国区選出理事	清島 保	九州大学大学院歯学研究院	この度、口腔担当として立候補させて頂きたく存じます。病理学会規定にもあります“口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務を普遍的に提供するために、口腔病理専門医制度運営委員会の活動を通じ、口腔病理医の育成、口腔病理専門医の資格認定、口腔病理専門医の生涯研修、コンサルテーションなどに関わる活動を行う”ことを、口腔病理部会の礎として活動を進めます。そして、これまで口腔病理部会担当された方々の行動目標や課題を引き継ぎ、現状を改善しつつ、整備を進めたいと思っています。微力ではございますが、精一杯口腔病理部会の発展のために尽力する所存ですので、何卒ご支援、ご協力の程心よりお願い申し上げます。また、これまでと同様、皆様の口腔病理への理解と共にご支援およびご教授頂ければ幸いです。

選出区分4：監事 2名

※表記は応募順

区分	氏名	所属(本人申請)	所信表明
監事	笹野 公伸	東北大学大学院医学系研究科医科学専攻	これまで約20年間近く日本病理学会理事として国際交流、教育、研究推進他色々な経験を積ませていただきました。加えて第105回日本病理学会総会を仙台で開催させていただきました。種々不備な点があったかとは思いますが、会員の多くの先生方のご協力を得まして無事に終わらせていただきました。そこで今回病理学会への最後のご奉公として監事として立候補させていただく事になりましたのでよろしくお願い申し上げます。
監事	野口 雅之	筑波大学医学医療系診断病理学	日本病理学会が学術面での病理学をサポートするだけでなく、診療標榜科としての病理診断科と病理専門医制度も統括し、かつ一般社団法人組織となつてより業務が多様化する中で財産状態や理事の業務執行を適切に監督することは極めて大切であると考えます。私は2013-2014年の間、監事を努め、その重要性を認識しました。今回、再度監事に立候補させていただきたいと思います。前回の経験を生かし、病理学会の発展のために最善を尽くす覚悟です。